

トップ対談 41

組合員・地域とともに



「地域に笑顔と豊かな暮らし」を! (下)

ゲスト／眞利子 伊知郎 (東京都JA東京スマイル 代表理事組合長)

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授

京都大学学術情報メディアセンター研究員

石田正昭



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

第41回ゲスト

東京都JA東京スマイル 代表理事組合長

眞利子 伊知郎



まりこ・いちろう

1959年東京都生まれ。大学卒業後、大学に勤務し、86年に就農。江戸川区農業協同組合青年部長、JA東京青壮年組織協議会委員長、全国農協青年組織協議会副委員長などを務め、2017年東京スマイル農業協同組合理事就任。専務理事を経て20年から現職。相続や税務の相談対応力強化のため、職員教育にも力を入れる。

* 前回の記事は[コチラ](#)から

「地域に笑顔と豊かな暮らし」を！

ＪＡ東京スマイルのキャッチコピーは「地域に笑顔と豊かな暮らし」。組合員家族に笑顔が広がり、豊かな暮らしが実現されることを目指している。ＪＡの事業と活動はそのためのもの。今回は、眞利子組合長にパートナーシップ、組合員組織の育成、職員の資格取得、生活文化、広報などの観点から、ＪＡの取り組みを語ってもらった。

■ パートナーシップでＪＡ力をアップする

石田：ＪＡ掛川市と連携協定を結ばれていますね。いただいているこのお茶も掛川茶ですか？

眞利子：そうです。「おいしい」と組合員さんからも好評です。新茶予約キャンペーンでは掛川の新茶を販売し、掛川農業祭ではＪＡ東京スマイルの小松菜を販売しています。

ＪＡ掛川市との連携協定は令和４（２０２２）年３月３０日に結びました。きっかけはいまから２５年前になりますが、『地上』２０００年８月号特集企画「農家夫婦にとってパートナーシップとはなにか？」という座談会でＪＡ掛川市の松永大吾さんと一緒にしたことにあります。

当時、わたしはＪＡ全青協の副委員長、松永さんはＪＡ掛川市の青年部長を経て理事を務めていましたが、協定の締結時はともに代表理事組合長になっていました。座談会ですぐに意気投合し、その後も個人的なお付き合いをつづけてきましたが、ともに組合長になったということで、ＪＡとしても正式なパートナーシップを築こうと連携協定を結びました。



ＪＡ掛川市とは、掛川農業祭での小松菜販売だけでなく、女性部同士の交流も盛ん。

「もの」だけではなく、「ひと」の交流をつうじて、役職員どうし、組合員どうしのきずなを強め、ＪＡ意識を高め合い、ＪＡ力をアップすることを目的としています。

石田：すばらしいですね。より一層の発展を期待しています。

ところで「農家夫婦のパートナーシップ」という点で画期的と思ったのは、今年2月27日に開催された東京都主催の「東京都農業・男女共同参画フォーラム」で、足立地区青壮年部・若葉会の横山めぐみさんが「SNSで庭先販売をPR・農園ファンの開拓について」と題し、LINEやInstagramを使ってファン層を開拓し、採れたて野菜の庭先販売に取り組んでいると報告したことです。広報誌「ほほえみ」2025年春号で拝見しました。

眞利子：足立区入谷の横山農園さんのことですね。ご主人は辰也さんといいますが、毎週水曜日と土曜日に採れたて野菜の庭先販売を行っています。情報発信を担当しているのがめぐみさんで、情報を受け取ったたくさんのお客さまが農園を訪れています。SNSを使っているだけあって、ご近所だけではなく、遠方からの来園者も多く、駐車場はいつも満杯です。



横山辰也・めぐみさん夫妻は、自分たちの横山農園だけでなく、近所の農家と協力して合同の庭先販売を行う。

伝統野菜の「足立のつまもの」のほか、各種の季節野菜を栽培・即売しています。庭先販売ですから、たとえばエダマメは鮮度を保つために枝葉付きで提供し、足りないときは目の前の畑へ採りに行くこともあります。時期によっては収穫体験も行っていて、親子連れにとっても人気があります。

SNSを使って生産者と消費者が簡単につながる時代にあって、都市農業の新しいロールモデルになっていると思います。

石田：そのとおりですね。ところで、めぐみさんが加入している足立地区青壮年部・若葉会というのは、どういうグループですか？

眞利子：ご主人が青壮年部の盟友で、その奥さまたちでつくっているのが若葉会です。彼女たちは青壮年部の盟友ではありませんが、さまざまなかたちで青壮年部を応援する活動を行っていて、青壮年部から助成を受けています。構成員はおよそ10名ですが、年齢の違いや農業経営に直接かかわっていることから、一般の女性部とはまた違った趣があります。

■ 資格取得で職員力をアップする

石田：葛飾区や江戸川区にも同じようなグループはありますか？

眞利子：ありません。ですが、過去には青年部へ女性が加入したことはありました。それも何度かありました。規約には、加入に当たって男性・女性という区別はありませんからね。

ただ、その多くは跡取りの娘さんが青年部へ加入したことによるものです。ですからお婿さんを迎えられたとき、そのお婿さんが青年部へ加入しています。全国的にみても、女性の加入を拒否している青年部はないと思います。

石田：そもそもが「青年部」というつくりですから、男女の区別は本来ありえないでしょう。農業をしっかりとやっている女性で、入りたいと思っている人や、盟友たちが入ってほしいと思う人が、どんどん青年部に入ってくるような仕組みがあってもいいですね。

眞利子：農業経営は、むかしもいまも女性の活躍なくして成り立ちません。わたしどもは、令和5(2023)年8月から東京都区部農業改良普及センターの協力を得て「農業実践力養成セミナー」を開催し、新規就農者やシニア就農者など、販売を目的に農業経営をしたいという意欲的な担い手を育成しています。

これまで20名が受講していますが、そのうちの9名が女性です。農家の奥さんや跡取りの娘さん、あるいはお嫁さんが受講していて、女性の受講生が増えています。開催していて感じることは、ご主人と一緒にやっていると「ただやっつけと言われるので、自分が何をしているのか知りたくて参加しました」とか、「自分がつくったものを売れるという喜びが分かってきたので参加しました」といった意欲的な女性が多いことです。

石田：そういう意欲的な女性の仲間づくりはたいせつです。彼女たちの思いや願いを女性部でカバーしきれなければ、青年部へ入るのも一つの方法ではないでしょうか。もともとJ A東京スマイルは女性正組合員の多いことが特徴ですから、若葉会はもちろんのこと、営

農意欲のある女性たちがどんどん青年部へ入ってくるようになるといいですね。

眞利子：令和7(2025)年3月末現在、正組合員戸数は4,192戸、女性正組合員数は1,403人で、1戸当たり0.33人が女性です。正組合員資格は農業従事日数30日以上で、J Aの方針として、資格条件を満たす女性たちの正組合員



今年度、第3期の農業実践力養成セミナーを8月から10回で開催予定。新規就農予定者を中心に9名が参加する予定。

化を推進してきました。

農家の実態からすると、農業をしっかりやって農地を守る一方で、賃貸住宅などをお持ちの方も多く、農業と不動産は切っても切れない関係にあります。その両輪をうまく回すためには女性の活躍が欠かせません。わがJA最大の組合員組織は「資産管理研究会」ですが、そこにも女性が多数加入しています。2次相続の問題もありますからね。

石田：そうすると営農相談だけではなく、資産管理相談、税務相談、相続相談など、農家の暮らしを総合的に高めるための渉外活動、相談活動が重要になってきます。何かことが起こったばあい、真っ先に相談するのがJAというような関係性の構築が必要です。

眞利子：そのとおりで、ファーストコンタクトのJAづくりを目指しています。これまで貯金や貸出の実績はある程度上がっていましたが、ファーストコンタクトのJAづくりという点ではやや消極的な面がありました。

それではいけないと思い、わたしが組合長になってからですが、実務職(1等級～3等級)と指導職(4等級～6等級)とに分けて、「人財育成プログラム」(チャレンジ資格)を策定し、年金アドバイザー、相続アドバイザー、ファイナンシャルプランナー、宅地建物取引士、日商簿記などの資格取得を奨励しています。資格手当を充実させたほか、資格取得にかかる研修費用を負担しています。

これまで資格取得のチャレンジャーは一部の職員に限られていたのですが、少しずつ改善されてきました。現在は女性渉外も6名が活躍しています。

■「ほほえみ」で広報力をアップする

石田：広報誌は、正組合員向けの「ほほえみ」と准組合員・地域住民向けの「ほほえみPetit(ぷち)」がありますが、ともにすばらしい出来栄です。

眞利子：ありがとうございます。「ほほえみ」は年4回、「ほほえみPetit」は年1回発行しています。「ほほえみ」の配布は支部長にお願いし、「ほほえみPetit」は准組合員へ郵送するほか、店頭に置いています。

石田：広報誌は支部長さんが配布するんですか？

眞利子：そうです。わがJAの支部は集落組織に対応するものですが、全部で265支部あります。支部に班があるような大きなところでは班長に配布をお願いしています。毎年、お礼の意味を込めて「役員支部長研修会」を開催していますが、およそ3分の1の方々にお集まりいただいています。皆さん配布に協力的ですが、高齢化とともに少しずつ難しくなっているのが現状です。

石田：広報課の体制はどうでしょうか。

眞利子：総務部広報課に課長と係長の2名を配置しているほか、通信員として13支店にそれぞれ1名と営農指導課の3名を任命し、合計18名体制で臨んでい

ます。通信員は1年交代で、4月の事業進発式で任命していますが、そのほとんどは入組2年目の職員です。

石田：毎号掲載の「通信員だより」はどれもよくできていますが、皆さん素人なんです。

眞利子：J A東京中央会で毎年4月に通信員向けの研修会があって、そこで1日間だけですが、記事の書き方とか写真の撮り方とかを学んでいます。そのあとは実際に「通信員だより」を書くことでスキルアップを図っています。

石田：「ほほえみ」2024年秋号に「J A東京グループ日本農業新聞事業実績表彰で、伊興支店の中戸賢太郎渉外係が管内の養蜂家取材した記事が写真の部で最優秀賞を受賞したほか、出稿部門でJ A東京スマイルが3年連続、個人表彰で今泉真理子広報係長が4年連続で表彰された」と出ています。すごいですね。



J A職員として、日ごろから付き合いがあるからこそ「迫った」写真も撮影ができる。

眞利子：養蜂家は福原保さんです。「ミツバチ博士のふくちゃん」

と呼ばれ、松屋銀座の屋上で「銀座ミツバチプロジェクト」に参加している有名な方です。足立区のご自宅では工務店を経営されていて、住宅地のなかでハチミツ採取を行っています。中戸君の出稿記事は背景に電信柱も映っていて、カメラアングルがとくに優れているという評価をいただきました。

石田：養蜂業というのは行政的には畜産業の一分野です。

眞利子：養蜂業は管内にも広がっていて、ニホンミツバチを飼育する直売農家や、ご自身の果樹園で養蜂する農家もいらっしゃいます。「ミツバチ博士のふくちゃん」のハチミツは、足立区のJ A直売所「あだち菜の郷」で販売していますが、そのほか「葛飾元気野菜直売所」でも地元農家が採取したハチミツを提供しています。

石田：「ほほえみ」2025年新春号に『令和6年度J A共済全国小・中学生書道コンクール』半紙の部で、江東区立第三砂町中学校の3年生が2年連続で最高位の農林水産大臣賞を受賞した」と出ています。江東区もJ A東京スマイルの管轄区域ですか？

眞利子：そうです。ただ江東区全体ではなく、東部の砂町（現北砂・南砂・東砂）だけが管轄区域となっています。砂町はもともと砂村といって、われわれと同じ南葛飾郡に属していましたが、昭和5（1930）年の荒川放水路（荒川）の完



応募作品が多く、表彰式もJA独自で行う。



成によって、われわれから見ると対岸の地区となりました。その後、昭和22(1947)年に江東区の新設とともに江東区へ編入されました。

石田：なるほどね。江東区の一部というのは砂町だったんですね。

ほかにも、全国コンクール(半紙の部、条幅の部)の入選作品が3つもあります。JA東京スマイルの予選審査会では貴兄を中心に常勤役員も審査に参加していて、熱心さが伝わってきました。

眞利子：令和4年度も、わがJAから農林水産大臣賞の受賞者を出しています。ですからJAでいうと3年連続の受賞となります。

そもそもの応募点数が、ダントツに多いというのがわがJAの特徴です。令和6年度のばあい、小・中学校や書道教室の先生たちのご協力によって合計1,532点もの応募がありました。ですが最初から応募が多かったというわけではなく、いまから30年くらい前になりますが、コンクールへの応募がなかなか集まらないというなかで、現・広報課長が共済担当だった時に小・中学校や書道教室をくまなく回って応募を働きかけたことによるものです。その努力がいま実っています。

石田：何事も一生懸命にやらないと、成果は出ないということですね。

(取材／2025年5月8日)

きら女子を訪ねて“Let's Cooking”



2025年新春号掲載の「味も栄養も相性ぴったり カキと小松菜のオイスターソース炒め」

J A東京スマイルのキャッチコピーは「地域に笑顔と豊かな暮らし」。広報誌「ほほえみ」の<きら女子を訪ねて“Let's Cooking”>は、組合員の笑顔と豊かな暮らしを伝える好企画である。

なかでも印象的なのは「ほほえみ」の表紙を飾る<きら女子>たちの畑での笑顔。<きら女子>とは地域農業の担い手として、元気に活躍する女性たちのこと。彼女たちのつくる「野菜を使った農家メシ」は、裏表紙にレシピ付き写真で紹介されている。

担当者によれば、<きら女子>たちはいずれもJ Aに協力的で、J Aからの直接の依頼に快く応じてくれたという。

掲載されたレシピは、たとえば、2024年夏号では「旬の野菜でアレンジ自在 **夏野菜カレー**」「ポリポリ食感が心地よい **キュウリの南蛮漬**」、2024年秋号では「なんと商品化してしまった **小松菜の豆乳ポタージュ**」「手軽で彩りも豊か **小松菜とアボガドのサラダ**」、2025年新春号では「味も栄養も相性ぴったり **カキと小松菜のオイスターソース炒め**」「甘酸っぱさと歯ごたえがクセになる **切り干し大根のあえもの**」などなど。

創刊100号を迎えた2025年春号は、少し趣向を変えて<足立地区青壮年部・若葉会を訪ねて>と銘打ち、本文で登場した若葉会のメンバーが「カブの甘さが際立つ **カブとレタスのチョレギサラダ**」「味噌とバター風味でおいしく **白菜と豚肉の味噌バター鍋**」を紹介している。

どの料理も美しく、おいしそうに映っている。そこには豊かな暮らしを伝える<きら女子>たちの笑顔も添えられていた。